



Title	近代輸出工芸の受容 : 19世紀の在外日本陶磁コレクションを中心に
Author(s)	畑, 智子
Citation	デザイン理論. 2005, 46, p. 172-173
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53168">https://doi.org/10.18910/53168</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 近代輸出工芸の受容

— 19世紀の在外日本陶磁コレクションを中心に —

畑 智子／大阪市立住まいのミュージアム学芸員

19世紀後半、日本において、陶磁器・漆工・金工・木工などの工芸は藩の庇護を失うなどの大きな社会変革にともない、海外に市場を求めるようになる。また幕末から明治初期の万国博覧会を通じて、明治新政府は工芸の積極的な輸出振興をおこなう。浮世絵などの「流出」した美術品ではなく「輸出」された工芸品は、海外でどのように受容されたのであろうか。

この発表では、1867年から1890年頃までに日本の工芸品を収集したイギリス・リヴァプール在住のジェイムズ L. ボウズ (James L. Bowes) に焦点をあて、このコレクションの内容や収集方法、著書やその情報源などについて整理し、分析をおこなった。

ボウズは港町リヴァプールで毛織物商として財をなし、陶磁器、七宝、漆工芸、書画、金工、書籍、象牙、木彫、染織など多岐にわたった日本の美術工芸を収集した。残念ながらこのコレクションは、1899年のボウズの死後、オークションにかけられてそのほとんどが散逸した。しかし、特に力を注いだ陶磁器と七宝については自身の所蔵作品も含めた図版を掲載した書物を数冊出版している。例えば日本の陶磁器について書かれた1875年発行の『日本の陶磁 (Ceramic Art of Japan)』には、ボウズ自身のコレクションの他、ドレスデンやエジンバラなどに所蔵されている日本の陶磁器も石版で印刷されている。内容は日本美術の概要、日本の陶磁器の概要に続いて「肥前」「薩摩」「伊勢」「加賀」「京都」「尾張」「淡路とその他」と地域別の作品解説を図版とともに掲載している。掲載している

作品の傾向としては、色絵や金彩を施した装飾的陶磁器が圧倒的に多い。

その後『日本の落款・印章 (Japanese Marks and Seals)』『日本の七宝 (Japanese Enamels)』『日本の陶器 (Japanese Pottery)』と次々に出版する。

またリヴァプールアートクラブやサウスケンジントン博物館で自身のコレクションの展示を行い、1890年には自宅に日本美術品を展示する美術館を作って一般公開した。日本という国がまだほとんど認知されていなかったこの時期にリヴァプール市民に日本美術品を恒常的に公開した意義は大きい。

ボウズは直接日本に来ることなく、イギリスやヨーロッパで主に博覧会の機会に収集していた。日本に領事として来日し『大君の都』の著書としても有名なラザフォード・オールコック (Rutherford Allcock) は『日本の美術と美術工芸』(1878年刊)の中でボウズの著書に触れている。ここでは「ボウズの本は調査内容が不十分である」としながらも、基本的にはボウズの薩摩焼を最上のものとする意見に賛同し、「装飾美術こそが我々の生活につながる芸術である、と記したボウズの意見に賛成である」と全面的に賛同の意を示している。

一方、ボウズのコレクションと興味深い対比をなすのが、ボウズよりやや遅れて日本の陶磁器収集をおこなったアメリカ人の学者エドワード・モース (Edward S. Morse) のコレクションである。モースは三度来日 (1877年、1878年、1882年) し、考古家・蜷川式胤の指導を受けながら体系的に日本の陶

磁器を収集した。蜷川式胤は1876年から77年に『観古図説』を発行し、日本の陶磁史としてひとつの指標を打ち出している。モースがまとめた『Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery』（1901年発行）の成果は、『陶器大辞典』（小野賢一郎著）などその後の陶磁史研究にも反映されている。

しかしながらモースコレクションでは当代に制作された装飾性の強い輸出用陶磁器が完全に排除されていた。モースはボウズの美術館を訪れたこともあり、特に装飾的な陶磁器について二人は議論している。

モースは茶道具を最高とする日本の茶人の価値観に従って、装飾のない無釉陶器、中でも茶入れを最高のものとした。一方ボウズは、薄い黄色みを帯び、細かい貫入が入った地に華やかな色彩を施した薩摩焼を最上のものとし、日本の焼き物を装飾のあるものとなし、という分類をおこなった。モースが雑誌によってボウズの趣向について暗に批判したことに対し、ボウズは『装飾陶磁器の正当性』という本を私家版で出版することによってモースに反論した。

しかし結局モースや蜷川らがその基礎を作った日本陶磁史においては、大量に輸出された明治期の海外向け陶磁器は「本物の日本陶磁器」ではないとして排除されたのである。この時期「日本美術史」においても体系化が進められ、美術の範疇の設定が行われてくる。何が「本物」であるとされ、何が排除されたのか、その範疇の制定にどんな要素が関わっていたのか、ボウズコレクションはそうした問題点を提示してくれる恰好の資料といえる。